



WÖRTERBUCH
DEUTSCH-JAPANISCH

CROWN

Dritte Auflage

SANSEIDO



WÖRTERBUCH
DEUTSCH-JAPANISCH

CROWN クラウン 独和辞典

第 3 版

[監修]…濱川祥枝
[編修主幹]…信岡資生

三省堂

1991年3月1日 初版発行

1997年3月10日 第2版発行

2002年2月10日 第3版発行



クラウン独和辞典 第3版

2002年2月10日 第1刷発行

監修 濱川祥枝 (はまかわ・さかえ)

編修主幹 信岡資生 (のぶおか・よりお)

発行者 株式会社三省堂 代表者 五味敏雄

印刷者 三省堂印刷株式会社

発行所 株式会社三省堂

〒101-8371

東京都千代田区三崎町二丁目22番14号

電話 編集 (03) 3230-9411

営業 (03) 3230-9412

振替口座 00160-5-54300

商標登録番号 663091・663092・1959488

<http://www.sanseido-publ.co.jp/>

〈3版クラウン独和・1872 pp.〉

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-385-12008-0

Ⓔ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

© Sanseido Co., Ltd. 2002

First Edition 1991

Second Edition 1997

Third Edition 2002

Printed in Japan

編修委員

監修	濱川 祥枝	HAMAKAWA, Sakae
主幹	信岡 資生	NOBUOKA, Yorio
	赤司英一郎	AKASHI, Eiichiro
	新井 皓士	ARAI, Hiroshi
	飯嶋 一泰	IJIMA, Kazuyasu
	石井 正人	ISHII, Masato
	重藤 実	SHIGETO, Minoru
	檜原 良行	NARAHARA, Yoshiyuki
	新田 春夫	NITTA, Haruo
	福本 義憲	FUKUMOTO, Yoshinori
	藤井 忠	FUJII, Tadashi
	前田 良三	MAEDA, Ryozo
	光野 正幸	ITSUNO, Masayuki

校正協力：	今井 千景	植松なつみ	櫻井 麻美
	関口なほ子	立川 睦美	内藤 麻弥
	山路みどり	吉村 創	

挿絵：	浅野 輝雄	キャデック	
写真提供：	遠藤 紀勝	鹿児島繁雄	田中 誠一
	福本 マナ	山口かの子	
	世界文化フォト	佐竹 宏	和田 光弘
	大沢商会	オーストリア政府観光局	
		Central Audiovisual Library, European Commission	
地図：	平凡社地図出版		
装丁：	三省堂デザイン室		

第3版 序 文

今ここによりやく『クラウン独和辞典 第3版』を上梓するに当り、先ずは辞典の作成に携わったすべての関係者一同と共に完成の喜びを分かち合うと同時に、『クラウン独和』の創始に偉大な貢献を果たされた国松孝二東京大学名誉教授に対する深い敬愛の念を新たにしたい。

顧みれば、『クラウン独和辞典』の第1版が産声を上げたのは今を去る10年前のことであった。その6年後に続いた第2版とも、幸いにして広く多大の理解と賛同を得るところとなり、幾度も刷を重ねて今日に及んでいる。この第3版の編集作業は、既に第2版の刊行直後から継続して始められた。それは、絶え間なく変動する社会と学術文化の状況にいち早く応ずべきこの種の語学辞書が負う責務からだけでなく、本辞典の場合特に以下の事情が加わったことにもよる。

一つにはドイツ語自体に生じた正書法の改正とその普及である。1世紀ぶりの正書法の改革はドイツ語圏諸国の合意を得て1998年8月からその導入が始まり、既に第2版でもそれへの対応措置を講じたが、当初は当事国自体の中でもなお見られた新正書法に対する異論や逡巡もこの間に次第に沈静化し、公的機関や学校教育において、さらには各種報道機関でも新表記への切り替えが着実に進行している。とりわけ日本のドイツ語教育の現場での新表記への切り替えと普及は予想を上回る速度で固まった感がある。こうした現状を踏まえ、この本書第3版では全面的に新正書法に準拠した。この点に関しては時期的にも幸いに「ドゥーデン正書法辞典」の第22版 („Duden. Die deutsche Rechtschreibung. 22., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. 2000“) や „Aktuell 2002“ をはじめとする各種独辞典・年鑑の最新版を参照することができた。ただし、既刊の各種出版刊行物や諸文献の利用者、あるいは古典の学究に配慮し、また公式にはまだ2005年7月末までは旧表記も認められているので、不慣れな方々の便宜のために旧表記から新表記への対照表も添えることにした。

次には、ここ数年間のドイツ語をめぐる内外の諸情勢の目まぐるしい変化である。国際的には21世紀への転換、IT革命、インターネットや移動式電話の急速な普及、マーストリヒト条約に基づく欧州共通通貨ユーロの2002年1月からの導入、コソボ紛争やテロ事件、家畜伝染病などがある。ドイツ国内に限っても、環境、福祉厚生、運輸通信、医療面などでの進歩や改革、政界・産業労働界における変動と再編成、各種法制度の改正、大学を含む教育制度改革など、枚挙に暇がない。それらに伴う新造語の続出、とりわけ国際共通語としての英語の浸透に

は著しいものがある。第3版ではそれらの新語を意欲的に採集し時間的に許容される限り極力収容する一方で、これら新語の増加による判型のいたずらな肥大化の抑止にも苦慮し、廃れた語の削除やレイアウトの変更などの措置をとった。結果として第2版とほぼ変わらぬサイズの中に最新の情報を併せ盛り込み得たと信じている。

もとより第3版の特色が表記の切り替えと新語の補充に尽きるものでないことは言うまでもない。語義が多岐にわたる語について添えた枠囲みの記述を全面的に改稿したのをはじめ、各見出し語についてつぶさに記述を見直して必要に応じた加筆訂正を行い、慣用語については新たにその由来の解説を加え、全般的に記号の用い方を整理して訳語表現の明確化を計った。またメモ欄と参考欄を新設して前者では該当語に関する重要な文法事項や新表記の説明を、後者では類義語についての解説を施した。そのほか固有名詞の記述の統一、諺・熟語慣用語の類の扱いの見直し、さらに第2版では別表索引としていた動詞変化形の本文見出しへの組み入れ、文法小辞典の大幅な加筆修正なども行った結果、この第3版は形式・内容にわたって第2版を一新する新版となったと自負している。

第3版の編集方針は第1版・第2版のそれを踏襲している。学習の初心者から各種分野における研究者や一般の社会人に至るまで、広くドイツ語に携わるあるいはドイツ語に関心を持つ人々に寄与し、日独学術文化交流の伝統を基盤にして彼我の情報交換による相互発展を念願とする。単なる初級学習辞典の域にとどまるものでもなければ、高度の学術専門家のみを対象とするものでもない。いささか欲張った望みかもしれないが、初心者にも分かり易く、専門家も飽きさせず、大方の納得のいく水準の記述・解説を心掛けた。その成果の程は斯界の判定に委ねることにしたいが、いずれにしても、第1版・第2版が贏^(カ)ち得た『クラウン独和』の「高度な水準と易しい解説」の定評を維持できることを念じている。

第2版に引き続き第3版の内容について責任を負うのは、赤司英一郎、新井皓士、飯嶋一泰、石井正人、重藤実、檜原良行、新田春夫、信岡資生、濱川祥枝、福本義憲、藤井忠、前田良三、光野正幸の13名の編修委員である。『クラウン独和』はこの版でも私たち全員が一致団結して出し合った叡智の結集の所産である。ただ第3版では主幹が交代して信岡資生となり、第1・2版の主幹濱川祥枝は大所高所の立場から辞典の編集を監修した。なお第2版まで編修委員の1人として協力した土合文夫は残念ながら今回は参加できなかった。

また、編集と校正に協力した別掲8名の諸氏は、編修委員に劣らぬ働きを見せて本書の完成に大きな役割を果たした。このような強力な助っ人を得たのは本辞典にとってまことに幸運であったと言うほかはない。

さらに私たち編修委員にとっての何よりの幸いは、本辞典の製作が、明治初期

から長年にわたって外国語辞典の作成を手掛け、辞書作りのノウハウに関しては他社の追従を許さぬ優れた技術と豊富な経験を持つ三省堂ならびに三省堂印刷株式会社の手によって行われたことである。私たちの身勝手を快く容れつつ本辞典を完成に導いてくださったこれらの職場の方々、特に企画から完成までの煩瑣な実務を統括された西野宮魔木部長をはじめとする三省堂外国語辞書出版部の諸氏の好意と助力に、なканずく第1版以来『クラウン独和』の製作に関与し、この第3版では直接の担当者として終始私たちの身近にあって、言うなれば私たちの同僚として活躍された同編集部の宇野由美子氏の機敏な手腕と行き届いた配慮と献身的な尽力に、編修委員を代表してここに改めて深く感謝の意を表したい。

最後になったが、利用者各位には本辞典に対する忌憚のないご意見やご批判をお寄せくださるようお願いしたい。これまでも第1版・第2版についてお受けした数々の貴重なご高見やご指摘は、この第3版の編集に当り有難く役立たせていただいた。同じようにこれからもご意見やご感想を承ることが叶うならば、『クラウン独和』の今後のために有益な資料とさせていただくだけでなく、ひいては日本におけるゲルマニスティックの発展のためにも大切に取り扱う所存である。

2001年 晩秋

信 岡 資 生

この辞典の約束ごと

1 見出し語

1-1 配列

1-1-1 見出し語の配列はアルファベット順とし、小文字を大文字の先に置いた。

1-1-2 ä, ö, ü はそれぞれ a, o, u のあとに、ß は ss のあとに置いた。

1-1-3 同一のつづりの語は、原則として語源を異にする場合は右肩に番号を付して別見出しとし(例: ***Mark**¹ ..., **Mark**² ..., **Mark**³ ...), その他の場合は I II III... で語義を分類した。

1-1-4 同義語や正書法の揺れている同一語が相前後してアルファベット順に並ぶ場合は、コンマを置いてそれらを並記した。例: **ge-spens-tig** [gəʃpɛnstɪç], **ge-spens-tisch** [gəʃpɛnstɪʃ] 図 幽霊のような...

1-1-5 二様のつづり字が併存する場合、主表記に記述を施した。従表記には＝で主表記を指示するにとどめたこともある。例: **Alp-traum** [álptraum] = Alptraum.

また、主表記を先に見出しとし、従表記をアルファベット順にこだわらずその直後に併記した場合もある。

例: **To-po-gra-phi-e**, **To-po-gra-fie** [topografi:] 図 ~/-n ...

1-2 正書法・語形

1-2-1 正書法は主に Duden, Die deutsche Rechtschreibung. 22., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Mannheim 2000. によった。

1-2-2 形容詞、数詞は格語尾を省いた形を見出し語にした。

例: ***ei-nig** ... 図 ..., ***dritt** ... 図 《序数; ➡¹》...

一部の代名詞 (manch, welch など)も格語尾を省いた形を見出し語にした。

1-2-3 常に定冠詞を伴う名詞は、その定冠詞を見出し語の前に付けた。例: **die El-be**

1-2-4 はほとんど 1 語と見なすことのできる 2 語以上から成る略語や外国語の成句の主なものはそのままの形で見出し語にした。例: **u.a.m., a pri-o-ri, en vogue**

1-2-5 分ち書きとつなぎ書きが併存するものは、つなぎ書きを見出し語にし、◆(➡3-8)を用いて分ち書きもあることを注記した。例: **auf-grund**... ◆ auf Grund と 2 語にも書く。➡Grund.

1-3 分綴

1-3-1 上掲の Duden, Die deutsche Rechtschreibung. 22. Aufl. により、↓(➡1-3-2), =(➡1-4)のほかの分綴箇所を・で示した。例: **in-te-re-sant**

1-3-2 動詞の分離前つづりの切れ目は↓で示した。例: **aus-ig-e-hen***

1-4 語構成

1-4-1 語構成を・で示した。・は原則として 1 見出し語につき 1 箇所とし、構成単位としては後つづりを優先させた。ただし、動詞の前つづりや、分綴点と一致しない後つづり(例: -er, -ung, -ig), 形に揺れのある後つづり(例: -ation, -tion)などは構成単位としなかった。例: ***Rei-se-bü-ro**, ***an-geb-lich**

1-4-2 外国語、完全にドイツ語化していない外来語、および固有名詞については、語構成を示さなかった。

1-5 基本語

1-5-1 教育上の立場から選定した第 1 次基本語約 2110 語の見出し語を色刷りとし、頭に ⚡ を付した。さらにその中の最重要語約 650 語については見出し語の活字を大きくして 2 行取りとした。

1-5-2 上記に準じて選定した第 2 次基本語約 3510 語の見出し語も色刷りとし、頭に * を付した。

2 発音

2-1 すべての見出し語の直後に [] を用いて国際音声表記 (IPA) による発音を表記した。

2-2 発音は主に Duden, Das Aussprachewörterbuch. 2. Auflage. Mannheim 1974. によったが、同書のその後の改訂版も参考にした。

2-3 基本語にはさらに仮名による発音表示も添えた。

2-4 語構成の第 1 要素を同じくする見出し語が連続するときは、その第 1 要素の部分の IPA 表記を省略した。例: **Ge-gen-wehr** [gɛˈɡɛ(ə)nveːɐ̯] ..., **Ge-gen-wert** [ˈɛːveːɐ̯t] ..., **Ge-gen-wind** [ˈɛːvɪnt] (ˈɛː- は一つの音節を表す)

2-5 名詞の格変化表示での複数形に幹母音の変化やアクセントの移動などがあるときは、複数形の直後にその IPA を表記した。(➡4-2-2)

2-6 語義の前の()に挙げた女性形(➡4-3)のアクセントが見出し語のそれより移動するときは、直後にその IPA を表記した。例: **Pro-mo-tor** [promóːtoːɐ̯] ... (⊗ Promotorin [...motóːrɪn])...

2-7 動詞で、[] に表示されている不規則変化の過去と過去分詞の幹母音が見出し語のそれと変わっているときは、それぞれの直後に IPA を表記した。(➡5-1-2)

2-8 形容詞・副詞で、[] に表示されている不規則な比較級と最高級の幹母音が見出し語のそれと変わっているときは、それぞれの直後に IPA を表記した。(➡7-3-1)

2-9 IPA 表記および仮名発音表記の基準については 12 ページ以下の「発音解説」参照。

3 語義・用例

3-1 語義の配列

3-1-1 語義は、なるべく使用頻度の高いものを先に配列したが、他方では個々の語義の相互連関も図った。

3-1-2 語義の分類は I II III..., ① ② ③..., (a) (b) (c)...., i) ii) iii)... の順序で、用例では i) ii)... で細分した。また並列される訳語は、で区切り、それら訳語群の意味に多少の相違があるときは ; で区切った。

3-1-3 基本語では代表的な重要訳語をゴシック体の色刷りにした。

例: **frech** ... 獰 ① (⊗ impudent) 生意気な、ふてぶてしい...

3-2 枠組み

3-2-1 語義が多岐にわたる語については、記述のはじめに枠を設けてその中に主な語義・用法をまとめて、全体的な把握と検索の便宜を図った。

3-2-2 関連項目 見出し語に関連する日常生活上の主な単語や事項を、記述のあとに枠を設けてまとめて挙げ、学習の参考とした。

3-2-3 [参考] 欄で、主な類義語をまとめて取り上げて解説した。

3-2-4 [文] 欄で、重要な文法事項や表記に関してまとめた解説を施した。

3-3 対応英語 語義の前に () を用いて、意味上(語源上でなく)または語法上対応する英語を ⊗ として適宜挙げた。例: **neh-men***... (⊗ take; ...)

3-4 類義語、反義語・対語

3-4-1 語義の前に () を用いて、→ として類義語を、↔ として反義語・対語を適宜挙げた。

例: **leicht** ... ② (⊗ easy; → einfach; ↔ schwer) 楽な、安易な、...

3-4-2 () に挙げる類義語、反義語・対語は原則として本辞典で見出し語に立てられているものに限った。

3-4-3 見出し語にない類義語は次のように示した。例: **Bar-on-nes-se** ... 《Frei(r)äulein》とも 男爵令嬢。

3-4-4 つらう字の一部が揺れたり、省略された別形が見出し語の場合、ふつう用いられているほうの見出し語を＝で挙げるとともに、記述は後者に譲っていることがある。例: **zapp-lig** [tsʌpɪɫɪç] = zappelig.

3-5 パターンの表記

3-5-1 訳語についてその語義・語法上のパターンを《 》を用いて示した。パターンを用例の中で《 》を用いずに挙げる場合もある。例: **ent-rin-gen*** ... 囃 [h] 《j³ et⁴》《雅》(△3から△4をもぎ取る、奪い取る、...

3-5-2 特定の成句でのみ用いられる語については、その語自体の訳語を挙げることも成句とその訳語のみを記すことがある。例: **E-vas-ko-stüm** ... 田 《次の成句で》im ～ 《話》(女性について)裸で。

3-5-3 パターン表示や用例中の句例では、次の符号を用いた。

j¹ (人の1格) △1, j² (人の2格) △2, j³ (人の3格) △3, j⁴ (人の4格) △4;

et¹ (事物の1格) △1, et² (事物の2格) △2, et³ (事物の3格) △3, et⁴ (事物の4格) △4

これらの人や事物が特定のものに限定される場合は [] を用いて、例えば △3[女性]、△4[約束ごとなど] などと記した。

なお、人および事物の交換が可能であれば j³ (et³) △3(△3) などとした。ただし、《 》内では 《j³/et³》(△3/△3) などとした。(→ 3-6-6)

3-5-4 上記の符号や、sich³, sich⁴, パターン化された所有代名詞の sein などはイタリック体とした。zu 不定詞[句]は ..., + zu 不定詞[句] と表示した。

3-5-5 特に他動詞について、4 格の直接目的語に相当する訳語が「...を」とならない場合は、パターン表示をして、その目的語に相当する訳語を例示した。例: **fra-gen** ... 囃 [h] (⊗ ask) 《j⁴》(△3)に尋ねる...

3-6 用例

3-6-1 分類した語義ごとに、訳語のあとで、最初の用例の前に — を入れて挙げた。

3-6-2 用例の数が多い場合は、当該見出し語が密接に結び付く語句や他の品詞などで分類し、— (前置詞と)、— (場所を示す語句と)、— (否定の語句と) などと注記して区分した。それらの区分の中では、例えば前置詞と結び付く用例が多ければそれら前置詞のアルファベット順に並べ、前置詞をボールド体とした。

3-6-3 用例中にそのまゝの形で用いる見出し語は ～ で示したが、以下の五つの場合はイタリック体で全書した。

• 見出し語自体のつらう字が 1 字ない 2 字、あるいは略語

• 文頭で

• 大文字と小文字の入れ替わり

• 1・3 人称複数の定動詞

• 名詞の複数形

なお単数名詞・形容詞は ～es, ～er, ～em, ～en などと格変化語尾をイタリック体で付加した。

3-6-4 用例中に用いる見出し語の变化形はイタリック体で全書した。動詞の現在分詞もイタリック体で全書し、分離動詞の zu 不定詞では zu 以外をイタリック体にした。

3-6-5 誤用を避ける意味から、必要に応じて用例中の名詞・代名詞の格や動詞の法を肩付き数字で示した。例: sich¹, auf et³, ～⁴, wollte¹ (接続法第 II 式の wollte であることを示す)

3-6-6 訳語・訳文や用例中の () は直前の字句との交換可能を、[] は省略可能を、/ は全文の言い換え(ただし → 3-5-3)を表す符号である。例: **be-trach-ten** ... et⁴ objektiv (unter einem anderen Aspekt) ～ △4を客観的に(別の観点に立って)見る。(= et⁴ objektiv betrachten △4を客観的に見る。et⁴ unter einem anderen Aspekt betrachten △4を別の観点に立って見る), **Krei-sel** ... [mit dem] ～ spielen 独楽で遊ぶ。(= Kreisel spielen) も mit dem Kreisel spielen でも、独楽で遊ぶ、の意), **ge-mäß** ... ～ seinem Wunsch/seinem Wunsch ～ 彼の望みどおりに。(= gemäß seinem Wunsch でも seinem Wunsch gemäß でも、彼の望みどおりに、の意)。

3-6-7 訳語・訳文や用例中では、適宜 → を用いて参照語や 3-8 の補足説明箇所 (◆) を指示した。

3-6-8 数詞などでの、統一記述の望まれる用法・用例は、特定の見出し語に代表例をまとめて挙げ、同種の他の見出し語では ⇒ を用いてその代表例を指示した。例: **neun** ... ◆他の用法・用例は ⇒ drei I.

3-6-9 用例で人を表す名詞や代名詞には女性形にも配慮したが、形容詞変化の名詞などでは、語尾による格表示が明瞭であることなどから、男性形で代表させた。例: ***pfle-gen***! ... einen Kranken ～ 病人の世話を

- #### 4 名詞

- ## 5 動詞

- 5-1 活用の表示
- 5-1-1 発音のあとに〔 〕を用いて活用を示した。〔 〕の中の⇒変化の次の数字は巻末の付録「動詞変化表」(1810-1827ページの動詞番号で示す)。
- 例: ***ar-bel-ten** ... (⇒変化 4), **durch-fah-ren***1 ... (⇒変化 49)
- 5-1-2 不規則変化(強変化, 混合変化)動詞は, 見出し語の右肩に * を付け, 単一語および基本語の非分離動詞では〔 〕を用いて, 2 人称単数現在 (du) 現在, 3 人称単数 (er) 現在; 過去; 過去分詞; 命令法の順に形を挙げた。ただし, 現在と命令法は幹母音が変わるもののみを挙げた。分離動詞では基本語の過去と過去分詞のみを挙げた。例: ***se-hen*** ... (*du siehst* [zi:st], *er sieht*; *sah* [za:]; *gesehen*; ㊦ *sieh*[e]; ⇒変化 155), ***be-sit-zen*** ... (*besaß* [baza:s]; *besessen* [bəzəsən]; ⇒変化 162), ***aus-gie-ben*** ... (*gab* [ga:p] *aus*; *ausgegeben*); ⇒変化 62)
- 5-1-3 不規則動詞(非分離動詞を含む)の幹母音の変わる単数 2・3 人称 (du, er) の現在形, 過去形, 過去分詞形, 幹母音の変わる命令法, 接続法第 II 式は別に見出し語として立て, < を用いて不定詞を挙げた。ただし, 分離動詞は過去分詞形のみを見出し語として立てた。また, sein, wissen などの特殊な変化形もそれぞれ見出し語として立てた。例: **er ver-spricht** (現在) < *versprechen*..., **sah** [za: ザー] (過去) < *sehen*...
- 5-1-4 過去と過去分詞に規則変化と不規則変化の両方がある動詞は, 見出し語の右肩に (*) を付け, 原則として単一語の〔 〕のうちでは i) ... ii) ... としてその両方の変化形を挙げた。語義や用法によって変化形が異なる場合は, それぞれの箇所で (i) の変化で (i) の不規則変化) などと記した。
- 例: ***sen-den***1 ... (i) *sendete*; *gesendet*; ii) *sandte* [zántal]; *gesandt*; ⇒変化 157 ⇒i) ...

- 5-1-5 規則動詞の中で特に注意を要するもの、例えば *frühstücken*, *veranlassen*, *willfahren* などは、適宜〔 〕の中にその過去や過去分詞の形を挙げた。例: **früh-stücken** ... [*frühstückte*; *gefrühstückt*]
- 5-1-6 *haben*, *lassen*, *sein*, *werden*, *wissen* など最重要動詞については、特に表を設けて変化形を掲げた。
- 5-2 自動詞、他動詞、再帰動詞、非人称動詞の区別
- 5-2-1 品詞名の表示を兼ねて、活用を示したあとに 自 他 他自 自他 再帰 非人称 と表示した。
- 5-2-2 一つの動詞でこの用い方が二つ以上に及ぶ場合は、逐一改行して ― 自 などとした。
- 5-2-3 用法に限定のある場合は、適宜〔 〕を用いて《否定の語句と》《受動態で》などと記した。
- 5-3 完了の助動詞の表示
- 5-3-1 すべての動詞について、自 他 再帰 などの表示のあとに〔 〕を用いて *h* (*haben* 支配) または *s* (*sein* 支配) と表示した。*haben* と *sein* の両方が用いられる場合は [*h*, *s*] と並記し、一方が優先する場合は [*s* (まれ: *h*)] などとした。
- 5-3-2 語義によって変動がある場合は、分類した語義ごとに訳語の前に同じく〔 〕を用いて表示した。
- 5-4 再帰動詞
- 5-4-1 すべての再帰動詞について再帰代名詞の格を〔 〕を用いて《*sich*⁴》《*sich*⁴》のように表示した。語義によって異なるときは分類した語義ごとに表示した。例: **über-spä-ten** ... 再帰 [*h*] 《*sich*⁴》遅れる、...
- 5-4-2 再帰 として独立させず、他動詞の語義分類の中で、あるいは用例中に、《再帰的に》として語義や用法・用例を挙げた場合もある。
- 5-5 非人称動詞
- 5-5-1 語義のはじめに *es* を主語とした文例を挙げた。
例: **reg-nen** ... 非人称 [*h*] (☁ rain) *es regnet* 雨が降る (降っている)...
- 5-5-2 非人称 として独立させず、自動詞の語義分類の中で、あるいは用例中に、《非人称的に》として語義や用法・用例を挙げた場合もある。
- 5-6 分 詞
- 5-6-1 用例の中で、現在分詞、過去分詞としての使い方を二つ以上まとめて挙げる場合は、― 《分詞の形で》、― 《現在分詞の形で》、― 《過去分詞の形で》と記した。
- 5-6-2 独立の形容詞・副詞とみられる現在分詞・過去分詞は別に見出し語として立てたほか、そのうちの過去分詞については該当動詞の記述の最後に つを用いてその見出し語を指示した。
- 5-6-3 見出し語とした現在分詞、過去分詞は、それぞれ〔現分〕〔過分〕と表示し、< を用いてその不定詞を挙げた。
- 5-6-4 形容詞・副詞として完全に独立し、分詞としての意識が薄れたもの、およびその不定詞が現在ではもはや用いられなくなっているものについては、単に 形・副 として〔現分〕〔過分〕の表示はせず、その不定詞を語源欄 (→15) に記した。例: **be-leibt** [*bəlaɪpt*] 形 ... 《beleiben》(古)「太らせる」
- 5-6-5 同形の不定詞と過去分詞が見出し語で相前後して並ぶ場合は、不定詞を先に置き、それぞれの見出し語の右肩に 1, 2 ... の番号を付けた。例: **ge-fal-len**¹ [*ɡəfalən* ゲファレン] ... 副 [*h*] ① ... 《*j*³》(③)の気に入る ... **ge-fal-len**² [*ɡəfalən* ゲファレン] 〔過分〕 <fallen... **ge-fal-len**³ 〔過分〕 <gefallen¹。
- 5-6-6 見出し語とした現在分詞・過去分詞に形容詞・副詞としての語義を記述する場合は、改行して ― 形 あるいは ― 副 とした。例: **rei-zend** [*raɪts(ə)nt*] (現分) <reizen. ― 形 魅力的な、...
- 5-7 不定詞の中性名詞化 用例の中で挙げる場合は、分詞に準じて、― 《名詞的に》などと記した。

6 助動詞

- 6-1 助動詞は 助動 《話法》、助動 《完了時称》、助動 《動作の受動》、助動 《未来・推量など》など并表示した。
- 6-2 すべての話法の助動詞について、特に表を設けて変化形を掲げた。
- 6-3 話法の助動詞の変化形は別に見出し語として立て、< を用いて不定詞を挙げた。
例: *ich, er kann* [*kan* カン] (現在) <können¹。 **könnte** [*kɔntə* ケンテ] (接 II) <können¹。

7 形容詞、副詞

- 7-1 形容詞は 形、副詞は 副 と表示した。
- 7-2 形容詞の用例の中には副詞的に用いられる例も含めて挙げたが、特に ― 《副詞的に》としてその用例を挙げた場合もある。副詞として独自の語義や用法を持つ場合は、改行して ― 副 として記述した。
- 7-3 比較変化
- 7-3-1 比較変化で幹母音が変音する形容詞や、不規則な比較変化をする形容詞・副詞では、見出し語の右肩に * を付け、形 副 のあとに〔 〕を用いて比較級、最高級の形をボールド体で挙げた。
例: **gut*** [*gu:t* グーテ] 形 [*besser* [bése], *best*]
- 7-3-2 比較変化で幹母音が変音する別形があるもの、および比較変化に規則的と不規則の両方があるものは、見出し語の右肩に (*) を付け、〔 〕の中に i) ii) としてその両方の形をボールド体で挙げた。
例: **fromm**(*) [*fʁɔm* フラム] 形 (i) *frommer*, *frommst*; ii) *frömmere* [*fʁœme*], *frömmst*
- 7-3-3 不規則な比較変化形は別に見出し語として立て、< を用いて原級を挙げた。
例: **käl-ter** [*kélte* ケッター] [比較級] <kalt... **käl-test** [*kéltəst* ケテスタ] [最高級] <kalt。
- 7-3-4 基本語で、比較変化のとき語幹末の *e* が脱落するなど、多少語形が変わるものは、* や !* は付けずに、〔 〕の中にそれらの変化形をボールド体で挙げた。
例: **dun-ke** [*dʊŋk(a)*] 形 [*dunkler*, *dunkelst*; *dunkl*-]
- 7-3-5 一般語で、最高級が *-est*, *[-e]st* となるものは、〔 〕内にボールド体でそれを示した。
例: **lax** [*laks*] 形 (*-est*)

- 7-3-6 原級で格語尾を付けたとき語幹末の e が脱落するなど、多少語形が変わるものは〔 〕の中にその形を挙げ、用例の中ではイタリック体で全書した。例: **pe-ni-bel** ... [...nibl-]
- 7-3-7 複合形容詞の基礎語が格語尾を付けたときや、比較変化で語形が変わるものは、⇒ を用いてその基礎語を指示した。例: **erd-nah*** ... [比較変化: ⇒nah],
- 7-4 格語尾を付けないものは〔無変化〕と記した。例: **li-la** [li:la] ㊦ [無変化] ふじ色の。
- 7-5 用法に限定のあるものについては、学習上の有効性の観点から適宜〔 〕を用いて《付加語として》《述語として》《副詞的用法なし》などと記した。

8 前置詞

- 8-1 前置詞は ㊦ と表示したあと、〔 〕を用いてその格支配を記した。例: ㊦ (3 格と)。
- 8-2 支配する格が二つあって語義によってどちらか一方のみが用いられる場合は、分類した語義ごとに訳語の前に〔 〕を用いて格支配を記した。
- 8-3 語義によって特別な用法がある場合は、《しばしば後置》《2 格; まれに 3 格と》などと記した。

9 冠 詞

- 9-1 冠詞は **der** は ㊦ (定冠詞), **ein**¹ は ㊦ (不定), **kein** は ㊦ (否定) と表示した。
- 9-2 定冠詞, 不定冠詞, 否定冠詞は男性単数 1 格のところにすべての格変化を表にして掲げ、用法・用例もまとめて挙げた。したがって **der** あるいは **ein** 以外の各性、各格の形の見出し語では ⇒ を用いて **der** あるいは **ein** を指示するにとどめた。 **kein** についても同様にした。
- 例: **den** ... ㊦ (定冠詞); ㊦ (指示・関係) ⇒ **der.**, **ei-nem** ..., **ei-nen**¹ ... ㊦ (不定); ㊦ (基数) ⇒ **ein**¹, **keines** ... ㊦ (否定); ㊦ (不定) ⇒ **kein**.

10 代名詞

- 10-1 代名詞は ㊦ と表示したあと、〔 〕を用いてその種類を《人称》《所有》《指示》《疑問》《関係》《再帰》《相互》《不定》などと記し添えた。
- 10-2 代名詞は男性単数 1 格(人称代名詞のみは人称, 性, 数別に 1 格)のところに格変化, 用法, 用例をまとめて挙げ、各性, 各格の形の見出し語では ⇒ を用いて男性単数 1 格(人称代名詞は人称, 性, 数別に 1 格)を指示するにとどめた。
- 例: **die-sem** ..., **die-sen** ... ㊦ (指示) ⇒ **dieser.**, **mir** ... ㊦ (人称) ⇒ **ich**.
- 10-3 指示代名詞 **der, derselbe, dieser, jeder** と, 所有代名詞 **mein, meinige, unser** については, 見出し語のところにその格変化を表にして挙げ、他の指示代名詞・所有代名詞については, 例えば **je-ner** ... ㊦ (指示) [格変化: ⇒ **dieser**] ...; **idein**¹ ... ㊦ (所有) [格変化: ⇒ **mein**¹] のように記してある。
- 10-4 人称代名詞は用例中ではイタリック体で全書した。

11 数 詞

- 11-1 数詞は ㊦ と表示したあと、〔 〕を用いてその種類を《基数》《序数》《不定》《分数》と記し添えた。これ以外の数詞(倍数, 種類数などは) ㊦ あるいは ㊦ とした。
- 11-2 数詞の一般の用法・用例は **drei, dritt** のところにまとめて挙げた。

12 接続詞

- 12-1 接続詞は ㊦ (並列), ㊦ (従属; 定動詞は後置) と表示した。
- 12-2 接続詞的に用いられる副詞は ㊦ とした。

13 間投詞

- 13-1 間投詞は ㊦ と表示した。

14 略語および記号

- 14-1 見出し語とした略語および記号
- 14-1-1 原則として発音を示したあと、㊦ (略) と表示した。
- 14-1-2 略語および記号は訳語のあと()の中に < を用いて元の形を挙げ、かつ略語に残された文字をボールド体で示した。
- 例: **UNO** [ú: no, jú: nou] ㊦ ㊦ ~ / 国際連合, 国連 (< 英語 **United Nations Organization**).
- 14-2 語義の記述や用例中に略語・記号が出る場合は、訳語のあとでも()を用い ㊦ (略) としてその形を挙げた。例: **zum Beispiel** 例えば (㊦ z. B.), **Mil-li-bar** ... ㊦ ~s/~ 《気象》ミリバール (㊦ mb, mbar).

15 語 源

- 15-1 学習上の参考に資する観点から、語義および用例のあとに〔 〕を用いて語源や派生関係を記した。
- 例: **Atom** ... ㊦ ギリシャ語「分割できない」
- 15-2 外来語について、その語の元の外国語名を日本語で記した。いくつかの言語を経てドイツ語に入ったものについては、原則として最終の経路のみを挙げた。例: **o-ran-ge** ... ㊦ フランス語
- 15-3 ゲルマン系の語についても、原義や語の由来を記すことがある。例: **Ge-bel** ... ㊦ 「木(枝)の股(股)」
- 15-4 派生語は、幹母音の変化などのため見分けのつきにくいものについてのみ、その元の語を記した。
- 例: **Ge-bir-ge** ... ㊦ Berg

16 複合語

16-1 語義を広め、また情報量の増加を図る観点から、記述の最後に「複合」としてボールド体で、その複合語(原則として当該見出し語が基礎語となっているもの)の主なものを挙げた。ただし、本辞典で別に見出し語として立てられているものは原則として除いた。

例: **Ge-mü-se** ... 複合 **Frisch-gemüse** 生野菜。

16-2 上記のほかにも用例中に当該見出し語が基礎語に、また規定語になっている複合語を適宜挙げた。

例: **Meis-ter** ... *Küchenmeister* コック長 ... *Meisterleistung* 名人芸。

17 外国語

17-1 外国語ははじめに《 》を用いてその外国語名を記し、品詞名を表示せず、相当するドイツ語を()を用いて訳語の前に挙げた。例: **co-ram pu-bli-co** ... 《ラテン語》(*öffentlich*) 公然と ...

別 表

別表 1

《古》	veraltet, veraltend	《スイス》	schweizerisch
《話》	umgangssprachlich, familiär, salopp,	《オーストリア》	österreichisch
	vulgär, derb, Rotwelsch, Gaunersprache	《学》	Studentensprache
《雅》	gehoben, poetisch, dichterisch	《幼児語》	Kindersprache
《官》	Papierdeutsch, Kanzleisprache, Amts-	《反語》	ironisch
	deutsch	《婉曲》	verhüllend
《方》	dialektisch, regional, landschaftlich,	《比》	bildlich, übertragen
	mundartlich	《戯》	scherzhaft

別表 2

《医》	医学, 解剖, 生理, 歯学	《魚》	魚類学, 魚	《天》	天文
《印》	印刷, 製本	《史》	歴史	《電》	電気
《映》	映画	《社》	社会学	《電算》	コンピューター, 情報通信
《織》	織物, 紡績	《写》	写真	《動》	動物学, 動物
《音》	音楽	《狩》	狩猟	《農》	農業, 園芸
《化》	化学	《宗》	宗教	《美》	美学, 美術工芸, 絵画, 彫刻
《海》	海事, 造船	《商》	商業, 簿記	《服》	服飾, 裁縫
《ギ神》	ギリシヤ神話	《植》	植物学, 植物	《文芸》	文学, 文芸学, 詩学, 修辞学
《旧聖》	旧約聖書	《心》	心理学	《法》	法律, 法学
《教》	教育学, 教育	《神》	神学	《北方神》	ゲルマン神話
《空》	航空, 宇宙	《新聖》	新約聖書	《虫》	昆虫学, 虫
《薬》	薬学, 薬	《人類》	人類学	《紋》	紋章
《軍》	軍事, 兵隊	《数》	数学, 幾何学	《郵》	郵便
《経》	経済, 経済学	《政》	政治	《理》	物理学
《劇》	演劇	《生》	生物学, 生物	《料》	食事, 料理
《建》	建築	《聖》	聖書	《林》	林業
《言》	言語学, 文法, 音声学	《生化》	生化学	《ロ神》	ローマ神話
《工》	工学, 機械	《地》	地質学	《論》	論理学
《光》	光学	《地理》	地理学		
《鉱》	鉱山, 鉱物, 鉱業	《哲》	哲学		

〔付記〕 聖書の書名の略記については共同訳聖書実行委員会の『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』(日本聖書協会 1987)の略語に従った。

発音解説

1 標準語の発音

1-1 ここに示す発音は標準ドイツ語の発音である。標準ドイツ語とは、高地ドイツ語を基盤として、次第に全国的に通用するようになった文章語であるが、19世紀になると標準語を口述する機会が増えたので、発音についても統一する必要が生じた。古典劇では早くから訛(なり)のない純粋な発音が尊重されたので、20世紀初めには舞台発音が正しい発音の模範とされたが、学校教育やマスコミュニケーションの発達によって標準語が普及するにつれて、舞台や歌曲などで用いられているいわば理想の発音と、その他の公的な場所で標準語として実際に話されている発音との間のずれが大きくなった。現在では、ドイツの発音辞典も、以前とは異なり、理想の発音よりも現実に広く用いられている発音を記述するようになっていた。また、例えば文学作品の朗読とニュース放送、あるいは座談会の場合など、発話の場面や発話の速度によっても標準語の発音がかなり変化することも指摘されている。日常生活で用いられる口語では方言の影響が強く現れているが、ここでは方言の発音は省略している。しかしオーストリアとスイスではそれぞれ独自の標準語の基準があるので、それらがドイツのそれと異なる場合にはそれぞれの国名を付けてその発音も併記している。

1-2 本書ではすべての見出し語の直後の〔〕内に国際音声字母(以下 IPA 記号と略記)を用いて発音を示している。基本語と、見出し語とになったその変化形の一部には、IPA 記号の後ろに仮名でも発音を示している。例: **Werft** [verft], **Zucker** [tsùkə ツッカー]

2 発声の仕組み

図1は音声器官の略図である。声帯から喉頭(のど)・咽頭(のど)・口腔(のど)または鼻腔を通して口または鼻孔(のど)に至る管状の部分は声道と呼ばれる。声道には舌・顎(あご)・唇・軟口蓋(のど)・口蓋垂など可動部分が多くあり、声道の形はさまざまに変えられる。発音のためにはふつう呼吸(肺から吐く息)を利用して、声道内のどこかで音を発生させる。この音源を発した音波は声道を通る際に、声道の形に応じて定まる声道の伝達特性の影響を受けた後、口または鼻孔から空中に放射される。声帯の振動によって生ずる音波は、三角波に近い周期的な波で、その基本周波数の成分と、その整数倍の多数の倍音の周波数成分を含んでいるが、周波数の高い成分は弱い。同じ音源から出たこの音波が母音によって異なる音となるのは、母音ごとに声道の形が異なり、その伝達特性、つまり共振周波数が異なるためである。音波が声道を通る際に共振周波数に近い倍音が強められ、母音の周波数スペクトルにはいくつかのピークができる。このピークの周波数をフォルマント(低い方から F₁, F₂, ...)と呼ぶ。母音の音質は低次のフォルマントの値で大体決定される。例えばドイツ語の [a:] では F₁ が 700 Hz, F₂ が 1200 Hz 位であるのに対して、[i:] では F₁ が 250 Hz, F₂ が 2400 Hz 位である。

子音について見れば、例えば無声摩擦音では声帯は開いていて振動しないが、声道の途中に極端な狭めが生じ、その点を呼吸が通過する際に生ずる雑音が音源となる。また無声破裂音では声道の途中に完全な閉鎖ができるが、閉鎖の背後の呼吸圧の高まりによってそれが開放されるときに生ずる破裂音が音源となる。いずれ

発音が二通りまたはそれ以上ある場合は、コンマで区切って併記する。その際、共通する部分は [...] を用いて省略し、アクセントのみの移動は音節記号 [-] によって示し、音の脱落や短縮がありうる場合には、該当する記号を () に入れている。例: **Kaffee** [káfe カッフエ, kafé: カフエー], **Akkusativ** [áku zati:f, - - - á], **Statistik** [ʃtatistik, st...], **übersetzen** [y(:)beʒéts(ə)n]

指示事項がある場合は () で示し、オーストリア・スイスの発音は () に入れて示す。例: **daran** [darán だら, 《指示性の強いときは》dáran ダーら], **Chirurg** [çirúrk (オーストリア: ki...)]

変化形についても適宜発音を付けているが、見出し語と共通の部分は [...] を用いて省略している。例: **Haus** [haʊs ハウス] ④ ~[ə]s/Häuser [hóyze], **Metrum** [mé:trum] ④ ~s/Metren [...tran]

語構成を - で示した語が続く場合、先行の語と発音が同一の部分は音節記号で示す。例: **Tank-säule** [táŋkzɔylə], **Tank-schiff** [-ʃif]

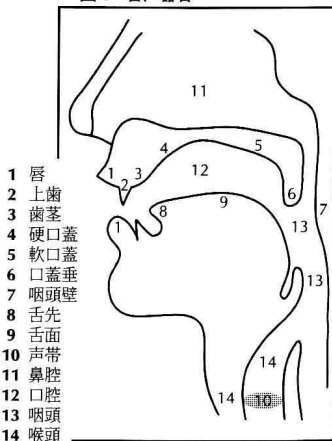
本書の発音表記は、主として Duden 発音辞典第2版(1974)に拠っているが(→❖1)、旧東ドイツの独語発音大辞典(1982)など、他の発音辞典や一般の辞典も参考にした。本書で用いた IPA 記号については3と4、仮名表記については5のほか、3と4の発音記号表を参照。

❖ 第3版では同書の第3版(1990)と第4版(2000)も参照した。

の場合も狭めまたは閉鎖の位置によって声道の伝達特性が異なるから、それによってそれぞれの子音に特有の音色が生じる。有声子音ではこれに音源として声帯振動が加わる。

以上のように、母音の場合も子音の場合もその音

図1 音声器官



質を決定するのは声道の形と動きであるので、調音音声学では、母音の場合は舌の位置と唇の形によって、子音の場合は調音の様式(破裂・摩擦など)と調音の位置(破裂・摩擦などが生ずる場所によって音の特徴を簡潔に示している。

なお声帯振動には音源としての機能他に呼吸量

3 母音

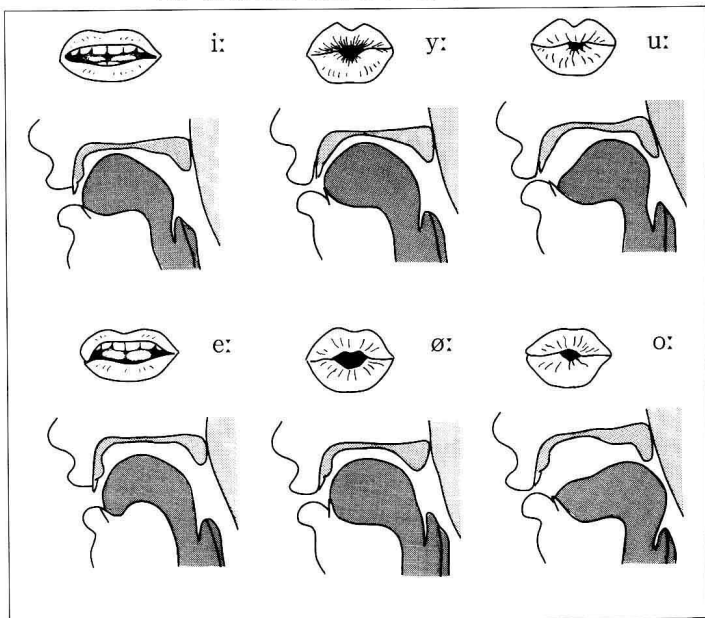
3-1 表1は水平方向の舌の位置を前舌・中舌・奥舌の3段階に、口の開き(舌の高さ)を狭2段階と半狭・半広・広の5段階に分け、さらに唇の円めの有無によって、アクセント位置に現われる単母音を分類して示したものである。図2、図3はWänglerを参考にして各母音の唇と声道の形を描いたものである(→◆²)。bieten [bi:t(ə)n] の [i:] と bitten [bɪt(ə)n] の [ɪ], beten [bé:t(ə)n] の [e:] と betten [bétt(ə)n] の [ɛ], fühlen [fý:lən] の [y:] と füllen [fýllən] の [ʏ], Öfen [ó:f(ə)n] の [o:] と öffnen [ófnən] の [œ], Huhn [hu:n] の [u:] と Hund [hʊnt] の [ʊ],

の調節によって音に強弱を付けたり、振動数の調節によって音に高低(イントネーション)を付けたりする働きもある。声帯の振動数がそのまま口から放射される音波の基本周波数となるからである。声帯の振動数が大きいほど声は高くなる。

表1 アクセント位置の単母音

	長 母 音				短 母 音			
	前 舌		中 舌	奥舌	前 舌		中 舌	奥舌
	非円唇	円唇	非円唇	円唇	非円唇	円唇	非円唇	円唇
狭(高舌)	i:	y:		u:	ɪ	ʏ		ʊ
半 狭	e:	ø:		o:				
半 広	ɛ:				ɛ	œ		ɔ
広(低舌)			a:				a	

図2 長母音の唇と声道の形 (a: と e: を除く)



長母音を「はり母音」、短母音を「ゆるみ母音」と呼ぶことがある。a についても奥舌の [ɑ:] と前舌の [a] に区別する資料もあるが、音質の差は小さいので、本書では [ɑ:], [a] と長短のみで区別している。[e:] (例: **bäten** [bɛ:t(a)n]) は長母音の中で唯一の開母音(ゆるみ母音)である(→³)。

長母音は開音節(母音で終る音節。例: **sie** [zi:]) にも閉音節(子音で終る音節。例: **Sieg** [zi:k]) にも現われるが、短母音はつねに閉音節(例: **Sinn** [zɪn]) に現われ、後続の子音との結び付きが弱い。

² Wängler, H.-H.: Atlas deutscher Sprachlaute (1964)

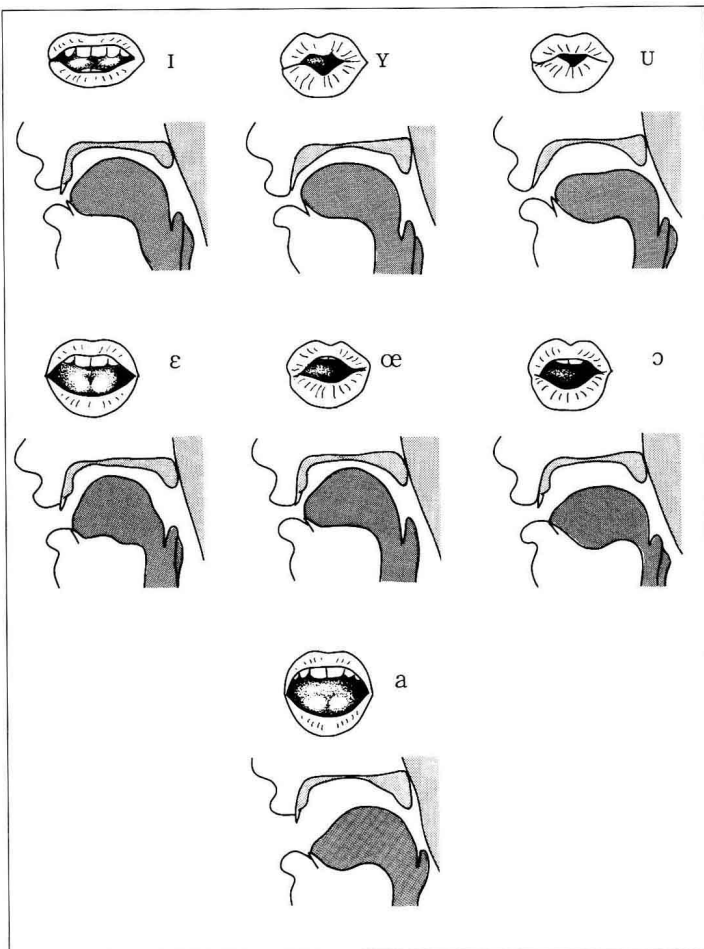
³ Wängler も a を [ɑ:] と [a] に区別しているが、本書では [a] のみ図示した。[ɑ:] についてはそれを参照。[e] と音質が同じ [e:] も図を省略した。

図 3 短母音の唇と声道の形

3-2 前舌円唇母音 [y:], [y], [ø:], [œ] は日本語にはない母音で、便宜上仮名発音では [ユ-], [ユ], [エ-], [エ] としている。これらは図 2, 3 から明らかなように、前舌非円唇(張唇)母音 [i:], [i], [e:], [e] と舌の位置はそれぞれほぼ同じであるが、唇に円めがある点で大きな相違である。例えば図 2 で [y:] と [i:] の舌の形はほぼ同じだから、唇を円めて [i:] を発音すれば [y:] の音になる。同様に唇を円めて [i], [e:], [e] を発音すれば、それぞれ [y], [ø:], [œ] の音になる。

3-3 [u:] は図 2 に見るように口の開きは小さく唇は強く円められ舌は高く奥に引かれていて、これほどではないが図 3 の [u] にも唇の円めが認められる。日本語のウ [u] には唇の円めはないから、u の発音の際には唇を円めるように努力し、舌の位置に注意する必要がある。

3-4 上記のはかアクセント位置には二重母音 [ai],



[au], [ɔy] もある (→ 4)。いずれも第 1 要素に音節核のある下降二重母音である。表 2 はアクセント位置の母音の発音記号表である。

◆⁴ この二重母音の表記は Duden 発音辞典第 2 版によっているが、このほかに [ae], [ao], [øə] あるいは [ai], [au], [ɔɪ] などの表記があり、第 2 要素の記号は一定していない。第 2 要素の記号は調音器官の移動の方向を与えるものと考えべきであろう。

3-5 表 2 に示す母音はアクセントのない位置にも現われるが、その際長母音は長さを失って短母音となることがある。例: **leben** [lé:b(ə)n], **lebendig** [lebén diç]

一般にアクセント音節よりも前にある長母音に短縮が起こりやすいといわれるが、資料によって異なることもある。このような場合は長音符を () に入れて示している。例: **widerfahren** [vi(:)defá:rən]

-bar, -sam, -los, -tum などのアクセントのない接尾辞では長さは維持されている。また **Auto, Europa** などの語尾の開音節にある母音も比較的長いとされ、詳しい表記では、[áuto:], [ɔyró:pa:] のように半長音符 [:] を付けて示すが、本書ではこれを省略している (→ 5)。

◆⁵ この母音は変化語尾 ~s が付くと長音化し、複合語形成の際には短音化するとされている。例: **Autos** [áuto:s], **Autobus** [áutobus] しかし実測による相対的な持続時間の比較では、複合語形成の際の母音の短縮は認められ、~s の付

加による長音化は認められなかった。恐らくこれはドイツ語の話し手の感覚に基づくものであろう。

3-6 母音の前の [i], [u], [y] は語義上の制約がなければ、音声環境によっては半母音化することがある ([i], [u], [y] で示す)。半母音化の範囲は資料によって異なるので、本書では Duden 発音辞典と旧東ドイツ発音大辞典と共に半母音としている場合に限った。半母音化が最も顕著なのは [i] で、[u] と [y] は少ない。例: **Lilie** [li:liə], **Linguist** [lingúist]

この他にフランス語系外来語の半母音 [w] がある。例: **Toilette** [twaletə] ドイツ語化した発音として [ɔ] で示されることもある。

3-7 中舌母音 [ə] (舌の高さは [e] と [ɛ] の中間で、唇・舌とも静止状態に近い) はアクセントのない位置にのみ生ずる。

語末や子音の前の **-el** [əl], **-em** [əm], **-en** [ən] では、[ə] が脱落し、[l], [m], [n] が音節核になることがある(詳しい表記では [l], [m], [n])。本書では Duden 発音辞典第 2 版に従って、次の場合の [ə] を脱落しやすい [a] としてかっに入れて示している。

① [əl], [əm], [ən] が摩擦音 [f, v, s, z, ʃ, ʒ, ç, x] または破擦音 [pf, ts, tʃ, dʒ] に続くとき。例: **spitzeln** [ʃpítʃ(ə)ln], **welchem** [vélç(ə)m], **Zeichen** [tsáic(ə)n] (縮小辞 **-chen** は例外: **Mädchen** [mé:tçən])

② [əl], [ən] が破裂音 [p, b, t, d, k, g] に続くとき。例: **Spiegel** [ʃpi:g(ə)ll], **Bodens** [bó:

表 2 母音の発音記号表 (1)

	発音記号	仮名表記	綴 字	例 語	備 考
長 母 音	[i:]	[イー]	i, ih, ie, ieh	/gel [í:g(ə)ll イーゲ ^ス], bieten [bí:t(ə)n ビーテン], ziehen [tsí:ən ツイーエン]	3-1, 3-2, 3-3 参照
	[e:]	[エー]	e, eh, ee	beten [bé:t(ə)n ベーテン], <i>Ehre</i> [é:rə エーレ], See [ze: ゼー]	
	[ɛ:]	[エー]	ä, äh	bäten [bét:(ə)n ベーテン], <i>Ähre</i> [é:rə エーレ]	
	[y:]	[ユー]	ü, üh, y	über [ý:bə ユーバー], <i>fühlen</i> [fý:lən フューレン], Typ [ty:p テュープ]	
	[ø:]	[エー]	ö, öh, oe, eu	Öfen [ó:f(ə)n オーフエ ^ス], Höhle [hó:lə ヘルレ], Goethe [gó:tə ゲーテ], Friseur [frizó:ø フリゼー ^ア]	
	[a:]	[アー]	a, ah, aa	aß [a:s アース], <i>fahren</i> [fá:rən ファーレン], Saal [za:l ザース]	
短 母 音	[u:]	[ウー]	u, uh	<i>Ufer</i> [ú:fə ウーファー], <i>Huhn</i> [hu:n フーン]	3-1, 3-2, 3-3 参照 ◆ 母音字に子 音字が 2 つ以 上続くときは、 ふつうその母音 は短い。
	[o:]	[オー]	o, oh, oo	Ofen [ó:f(ə)n オーフエ ^ス], <i>Ohr</i> [o:ø オアー], Boot [bo:t ボート]	
	[ɪ]	[イ]	i, ie	bitten [bít(ə)n ビッテン], Viertel [fírt(ə)l フィールテ ^ス]	
	[ɛ]	[エ]	e, ä	betten [bét(ə)n ベッテン], <i>fällen</i> [félən フェレン]	
	[ʏ]	[ユ]	ü, y	füllen [fýlən フュレン], Ypsilon [ýpsilon ユプサイロン]	
	[œ]	[エ]	ö	öffnen [ófnən オフネン]	
二 重 母 音	[a]	[ア]	a	fallen [fálən ファレン]	3-4 参照 ◆ [ui] はまれに 間投詞などに 現われる。
	[u]	[ウ]	u	Hund [hʊnt フント]	
	[ɔ]	[オ]	o	offen [óf(ə)n オッフエ ^ス]	
	[ai]	[アイ]	ei, eih, ai, ay, ey	<i>Eis</i> [ais アイ ^ス], <i>Reihe</i> [ráiə りーエ], <i>Hai</i> [hai ハイ], <i>Bayern</i> [báien バイアー ^ン], <i>Meyer</i> [máie マイアー]	
	[au]	[アウ]	au	<i>aus</i> [aus アウス]	
	[ɔy]	[オイ]	eu, äu	<i>Leute</i> [lýtə ロイテ], <i>äubern</i> [ýysen オイサーン]	
	[ui]	[ウイ]	ui	<i>hui</i> [hui フイ]	